

## 中論の構造

矢本利則

中論を一読すれば、著者龍樹の旺盛な否定の精神はすぐ感じとれる。その大いなる否定の精神の故に、中論は爾来、様々の異なった評価を受けることになる。曰く、虚無主義である。曰く、否定主義である。さらには、相對主義である等々。今、それらについて詳論するつもりはない、がただそれらの批判もまた、決して理由なくして生じたものでないと考えるならば、中論の中には既に批判的となるべき言説が見受けられるということになりはしないだろうか。たとえ、その言説がいずれ同じ中論の中で否定反駁されることになるとしても、龍樹の真意を把握しようと試みることは、同時に、中論の批判者と同じ陥穽に陥ちる危険を冒すことになりはしないか。

それでは、中論へのアプローチの為にどのような方法が可能であるのか。

思うに、中論の一語一句に囚われることなく、その全体の構造にむしろ注目して、内容の吟味の場合も決して構造を離れることなく、内容と構造とを互いに交渉させあうことだけが唯一可能な方法であろう。

中論は、27章から成り、現存するものは、龍樹自身の手になると思われる詩頌（偈）四四五余りのものに後の研究者の註釈を付したもので、これが中論と呼ばれている。考察の対象になるものは三種、青目註の鳩摩羅什漢訳本、月称註のサンスクリット本、無畏註のチベット本である。そのうち、サンスクリット本、チベット本においては、第一章の前に婦敬偈と呼ばれる中論全体の序文が位置しており、漢訳では婦敬偈が第一章の中に含まれているが、その内容の重要さからも、婦敬偈は第一章から独立させて考えるべきであろう。その婦敬偈はまた、漢訳がなじみ深く八不の偈とも呼ばれ、それは次の通りである。

「不生にして不滅、不常にして不断、不一にして不異、不来にして不出。能く是の因縁を説き、善く諸々の戲論を滅す、我は稽首し礼仏す、諸説中の第一なりと。」

さてこの漢訳との比較の上で、よりよく婦敬偈の理解がなされると思われるので、次にサンスクリット訳とチベット訳を参考に、多少意識した婦敬偈を紹介してみたい。

「（諸法は）生ぜず、滅せず、断ならず、常ならず、一義ならず、異義ならず、来たらず、去らず、安穩に戲論を寂滅せしむる（このような内容の）縁起（の法）を説き給える正覚者、諸々の説法者中最勝なるその人に私は敬礼する。」ここで諸法とは、この世の森羅万象の一切即ち一切の存在、真理、法則、及び仏教の教説（仏法）を意味している。

この二つの訳の対比、及びそれぞれの語釈から以下のことが見える。

戯論とは、無義・無益な言論の意味で具体的に龍樹の当時のインド思想界にあったインド教シヴァ派・インド教ヴィシヌ派・時論師・数論派(サートンキア学派)、勝論派(ウアイシエーシカ学派)・仏教内の説一切有部などのような法有の立場を指し、これに対する中論派即ち中観派の立場は一応法空と言えよう。しかし歴史的背景を抜きに考えても、戯論とは帰敬偈から、諸法の生・滅・常・断・一・異・来・去を容認する法有の立場であろうことは容易に推察しうる。則ち、帰敬偈は仏道(しかも大乘仏教)を正統とする仏道以外の説の否定を意味しているのである。

不生、不滅などによる八不の偈によって、帰敬偈は何を意味するのか。八不の内容は、四組の相反する極端な見解各々の否定である。しかし、必ずしも帰敬偈で挙げた四対の見解で事足れりとは出来ないだろう。漢訳本に青目註も八不に言及し、論敵の疑問を想定して言う、諸法は無量なり、何故に但だこの八事(八つの見解)を以って破すや。」と。それに対する青目の答えは、「法は無量なりと難も、略して八事を説けば、則ち、総じて一切を破すと為す。」とあり、他の註釈本も含めて、諸法の論破のために仮にこの八不で代表させているとするのが妥当であろう。則ち、あくまで八不は代表であり、帰

敬偈の真の目的は一切の見解の否定にある。

八不の偈の重要さは、龍樹の精神を継承する三論宗の「八不中道」或いは「八不顕実」と云う考え方によく示されている。則ち、生滅去来断常一異は八種の迷執であり、これらを否定しざるといことは、単に一の見解の否定に留まらず、両極端な見解の否定であるわけだから自然そこに中道の理が浮かび上がるわけである。八不中道はこのように相対差別を否定し絶体無差別を中に託しているのであるが、果して龍樹の意図が相対的な見解の否定による中道の主張にあるのかは未だ疑問の余地があり、八不の偈のみからは直ちに中道の主張は無理なものと考えられる。

再び帰敬偈の構造に着目すると、諸法が不生不滅である等の八不であるということは、則ち単にあらゆる全存在が不生・不滅……であるだけではなく、先に述べた諸法の定義より、あらゆる教説・真理も不生・不滅……なのであるから当然帰敬偈は、「諸法・八不(中道)」↓縁起(非法)↓八不(中道)という二重構造を有していると言えよう。

帰敬偈そのものの考察はこれまでに留め、次に帰敬偈とは最も密接な関係にある第一章観因縁品(縁の考察の章)の考察から更に帰敬偈の意味を探ってみよう。

結論から先に言えば第一章の主張は縁の否定にある。第一章を構成する四の偈々を考察してみよう。

第一偈は四不生の偈とも呼ばれ、生成の運動の否定で

ある。第一偈の理解の爲には第二偈をも合わせて考察する必要がある。そこでこの両者からすれば、第一偈の構造は次の如くである。則ち、「共よりならず」までの部は有因を否定し、「無因よりならず」で無因を否定している。更に第二偈は、有因の否定の論拠であると解せる。

第三偈は、小乗説一切有部の主張であり、この偈の真偽が以下の偈で考察される。

第四偈は、前半が果が有ると前提した時の果（を生ずる作用）と縁との関係を二つの場合に、後半が縁が有ると前提した時の縁と果（を生ずる作用）との関係を二つの場合に分類したもので、縁一般の考察に於ける設問、仮定の意義を持つ。

第五偈は、縁一般の定義、及びその定義による果と縁の考察で、前偈の仮定に対して疑問を投ずるものである。

第六偈は結論部分で、梵訳からは縁一般の否定が、更に漢訳からは有・無の否定もが意味されている。

第七偈、第十偈は各々四縁の否定にあてられる。則ち縁を全て否定することにより、説一切有部の説は論破されるわけである。就中第十偈は増上縁の否定であるが青目の註釈からこの偈は十二縁起説の根本をなす思想の否定であり、比処で遂に仏説も否定されるのである。

第十一―十四偈は再び果と縁、更に非縁の否定に当てられている。

一応第一章の全ての偈の意図は以上の如くであるが、

これらから我々が得られるのは、龍樹の積極的な主張ではなく、むしろ否定の精神、いや正確には否定の否定の運動である。例えば第八偈などに見られる「果の否定↓（無果）↓無果の否定↓…」などのように、更には縁についても「縁の否定↓（非縁）↓非縁の否定↓…」(第十六偈など)という図式が得られるように、この否定の否定の運動は中論の全体を覆っていると言えるのである。

この否定の否定の運動の背景をなしているのは根本的な仏説、「無執着」ということである。特に第一章に於ける法は、狭義の存在一般として用いられているのが大部分であるが、その法に広義の教説・真理の意味をも付すことよって、執着を断つための否定の否定の運動はより徹底したものとなっている。それがよく表われているのは第十偈である。まず十二縁起説の否定だけでも驚くべきことであるが、より意義あるのは第十偈の構造である。則ちこの偈の後半部「是の事有るが故に、是の事有り」と説くは然らず」を単に存在に限定せず、教説・真理などに広く適用すれば、前半部の「諸法は無自性なり、故に有相あること無し」という説の形にむしろそのまま当てはまるではないか、また前半部の前提によつて後半部の主張も成立する。よつて第十偈は、一つの命題であると同時に、同じ命題の否定の命題をも意味すると云う風に複雑な構造なのである。この矛盾即ち否定の否定の運動を短い偈の中で、しかも、単に一見解に闡説するのではなく、全諸法に適用し余すこと無く表出している点

特記すべきと思われる。

更に諸法は無自性なりという部分に着目すれば、むしろ先に得た諸法↓中道という図式の成立すら覚束なくなる。やはり中論は単に否定主義のそしりを免れ得ないのであらうか。

これまでは、帰敬偈、第一章のみの考察であったが、更に中論全体に目を向けてみよう。

中道の否定の精神を端的に言い表わしているのが空である。中論はむしろこの空の論書であると言っても過言ではない。それでは中論の偈の中から空に関して述べられている代表的なものを考察してみよう。

第四章 8・9 偈（以下 4・8・9 と略す）空義を以つてする論破・解説は、その否定非難が成立せず、完全なものとなる。

（十三・3）一切の法は空であるが故に、法は無自性あり、無自性な法であるから、法は存在しない。

（十三・8）は空と不空の否定である。

（十三・9）空は、諸見解の離説の為に説かれるが、空有りとする見解も、同時に否定されねばならない。

（二十二・11）「空であると言われるべきでない。然らざれば、不空である。其である又其でない。というのがあろう。然し、すべて仮説の為に説かれるのである。」

（梵訳）

（二十四・1・5・6・7）一切皆空と説けば、四聖諦も三宝及び世俗の一切諸法をも否定することになる、

と考えるのは誤りである。そのように考えるのは、空に於ける目的と、空性と、空と云う語の意味を知らないからである。

（二十四・18）「縁起であるものをすべて我々は空であると説く。その空は相對の仮説である。これがまさしく中道である。」（梵訳）即ち縁起↓空が強調され、初めて中道が主張されている。

（二十四・19以下）不空の否定。

さて、これらの偈からすれば、空もまた最高の真理として説かれてはおらず、我々に残されるのはやはり、否定の否定の運動である。ならば、この中論では一体何が主張されているのか。その解決の糸口は（二十四・8）にある。即ち「諸仏は二諦によって衆生のために法を説けり。一は世俗諦を以つて、二は第一義諦なり。」

この偈を空に適用すると、（A）「一切法は空である」とするものが世俗諦であるなら、（B）「一切法は空である」との主張も空である。」とするのが第一義諦と言えよう。更に、その（B）の主張も我々に了解された段階では、即ち世俗諦となり、その主張への執着を断つための（B）の更なる否定が第一義諦へと移行することになる。

このように、否定の否定の運動は常に、世俗諦から第一義諦の方向へ続く、謂わば上昇の否定であり、単なる否定の為の否定ではないのである。換言すれば、中論はこの複雑に呼応し合い、否定し合う偈の構造の中にこそ巧みに否定の否定の運動を現出することを始めて可能に

したのである。それ故に中論は、あらゆる執着を断つべき仏道の修行の方向を示した書である。しかも、ともすれば誤解を生じやすい言語を使用しながら、その言語による主張を主張とせず、その構造の中に最高の真理へ至る唯一可能な道程を示し得た、優れた実践の書と言えるのではないだろうか。